

# J. D. Salinger の初期の短編について (6)

小林 資 忠

(英米文学研究室)

## 0. はじめに

前稿<sup>1)</sup>において、J. D. Salingerの初期の短編の中で、(C) 戦時下の人々を扱った作品8編のうち、残りの4編について、各作品に使用されている口語英語の特徴を吟味しながら、作品の内容を検討した。本稿では、(D) 作家の問題を扱った作品3編について、同様な手順で登場人物の行動や考え方を考察してみよう。これらの作品3編のうち、最後の "The Inverted Forest"は約 25000語の作品なので、短編というよりも中編と言ったほうが適切である。引用の最後の ( ) の中に頁数を示す。

## 1. "The Heart of a Broken Story" (1941) について

この短編の主人公は週給30ドルで、印刷工として雇われている Justin Horgenschlagという31歳の青年である。彼は通勤バスの中で見かけた20歳の女性 Shirley Lesterのことが気になっているが、まだ話しかけたこともなく、頭の中で彼女とのきっかけ作りをいろいろと考えているだけであった。

ここで「わたし」が登場し、*Collier's* 誌に載せてもらうためにラブロマンスを書こうとしているが、上記の Justin と Shirley をうまくめぐり合わせることがなかなかできないでいることが告白される。そしてもう一度、Justin が Shirley の気を引くために、彼女への接近方法をあれこれ空想する場面に戻る。例えば、自分を紹介しながら、彼女にデートを申し込む。あるいは、自分は雑誌

の挿絵画家であり、あなたをスケッチしたいのと言いながら、彼女に近づく。または、でまかせに相手の名を言って、それをきっかけにして彼女の関心を引く。彼が彼女の前で気絶して見せて、倒れる寸前に彼女の足首をつかみ、そのはずみに彼女のストッキングを破り、後で新しいストッキングを送るからと言って、彼女の住所を聞き出す。さらに、話が飛躍して、バスの中で彼が彼女のハンドバッグをひったくって、後部の出口に突進するが、回りの人に捕えられてついには裁判にかけられる。彼女もやむなく出廷し、そこで彼は彼女の住所を知ることになる。やがて1年の刑務所での生活が始まり、彼は彼女宛に心のうちを吐露した手紙を書く。彼女も彼の純真さに感動し、彼に返事をくれる。その返事に対して彼は2回目の手紙を彼女に送る。しかし、彼女はもう彼に返事をくれない。そのうちに刑務所内で脱獄の話が持ち上がり、彼もこの計画に参加せざるを得なくなる。彼と16人の男の脱獄が成功しかけた時に、刑務所の塔の上にいる見張りの男がそれに気づいて、主犯をねらって発砲するが、運悪く、その弾が Justin に当たり、彼は即死してしまう。主人公の死によって2人の関係は途切れることになるが、「わたし」は空想の中で、2人の往復書簡を作成し、2人の心の交流を跡づける。

しかし現実には、2人は知り合いになることはなくて、それぞれの人生を歩んでいく。Shirley は結婚には至らないが、Howard Lawrence という青年と映画に行き楽しみ、Justin の方もふとした機会に結婚を焦っている Doris Hillman という女性を紹介され、彼女と親しくなるうちに、Shirley のことは次第に忘れていくことになる。

結局、「わたし」は男が女に会うことが必要であるラブロマンスを書けなかったのである。

### 1. 1. "The Heart of a Broken Story" に見られる口語表現について

この短編の中で、口語英語の特徴を表していると考えられる表現形式について、その顕著なものを探してみよう。それは主にJustinとShirleyの発話に見られるものである。

#### 1. 1. 1. I mean

この表現はJustinが言い換えのために、挿入的に使用したもので、この短編では2回見られるだけである。彼が相手に念を押しながら、話を進めているのが察知される。

(1) "Great little town, Seattle. I mean it's really a great little town. I've only been here — I mean in New York — four years. I'm a printer's assistant. Justin Horgenschlag is my name." (32)

#### 1. 1. 2. 軽蔑語法及び誇張表現

##### a) crazy

この語は形容詞として「正気でない、気が狂った」の意で2回使用されている。

(2) "... You should not feel abominable at all. It was all my fault for being so crazy so don't feel that way at all. ..." (131) [JustinからShirleyへの手紙の中で使用]

(3) "But that crazy part of my life is over. ..." (132) [ShirleyからJustinへの手紙の中で使用]

##### b) phony

この語は「いんちき、にせもの」の意で*The Catcher in the Rye* (1951)の中でも重要な語の1つとなっている。

(4) "... I'd like to be sure that you didn't catch hold of a phony best. ..." (132) [ShirleyからJustinへの手紙の中で使用]

##### c) goof

この語は((主に米略式))で「ばかな誤り;まぬけ、ばか者」の意で用いられるが、この短編では、Justinに言及して地の文で3回使用されている。

(5) This Horgenschlag may be a goof, but not *that* big a goof. He may have been born yesterday, but not today. (32)

(6) Anyone could *see* that this Horgenschlag was a goof. And after all. (131)

##### d) nuts

この語は"be mad about ..."の構文に見られるmadと同様に誇張表現として、「・・・に夢中になって、のぼせ上がって」の意で、Justinによって1回用いられている。

(7) "I beg your pardon. I love you very much. I'm nuts about you. I *know* it. ..." (32)

##### e) 数字を用いた誇張表現

この短編では、1例を除いて、きりのいい大きな数字を使用して誇張しているのが特徴であり、すべて「わたし」の視点から描写されたものである。

(8) He [Slicer Burke] puts his eight-by-twelve hands around the child's waist and holds her up for the warden to see. (131)

(9) But the fact remains that she did *not* answer his second letter. She never in a hundred years would have answered it. I can't alter facts. (132)

(10) Rather, I can best describe myself as having been one of the thousands of young men in New York who simply exist. (132)

(11) I'm a fool when I give orders. I suppose I'm just one of millions who was never meant to give orders. (132)

#### 1. 1. 3. gosh

この語はGodの婉曲語で、驚き、喜び、不快、のしり、困惑などの感情を表すことが多い。この短編ではJustinによって1回使用されているだけである。

(12) "... I'm a printer's assistant and I make thirty dollars a week. Gosh, how I love you. Are you busy tonight?" (32)

#### 1. 1. 4. or something; and everything

この短編では、この種の余剰表現は2例だけで、通例、表現をぼかして曖昧にしたり、しばしば強調の機能を持つ。特に次の(14)のand everythingはand allに置き換えることが可能である。

(13) Men would have heard her, and remembered the Alamo or something. (131)

(14) If she [Shirley] answered *this* silly letter the thing might drag on for months and everything. (131)

### 1. 1. 5. 間投詞 boy

この語は通例、年齢に関係なく男性に対する呼びかけ語として用いられると共に、「おや、まあ、やれやれ」などの間投詞として使われることも多い。この短編では、「わたし」の視点から1例だけ使用されている。

(15) Oh, boy. Those lines delivered with a weary, yet gay, yet reckless smile. If only Horgenschlag had delivered them. (32)

### 1. 1. 6. kind of, sort of

この表現は「多少、少し、いくぶん」などの意で、表現を和らげるのにしばしば使用され、この短編では次の2例において用いられているが、他の余剰表現である"in a way"や副詞 just と共起して、全体的に強調効果を高めている点にも注意したい。

(16) Shirley shows the letter to all her friends. They say, "Ah, it's cute, Shirley." Shirley agrees that it's kind of cute in a way. Maybe she'll answer it. (131)

(17) No one would take my orders. The typesetters just sort of giggled when I would tell them to get to work. (132) [Justin から Shirley への手紙の中で使用]

### 1. 1. 7. thoseの意の them

アメリカ口語英語では指示形容詞の those の代わりに them が使用されることが多いが、この短編でも1例だけ見られる。この傾向はアイルランド英語や黒人英語にも存在すると言われている。<sup>2)</sup>

(18) "Hey, warden!" yells Slicer. "Open up them gates or it's curtains for the kid!" (131) (「おい、看守長さんよ！」とスライサーは大声を上げる。「その門を開けなよ。さもなきゃ、このがきはおだぶつだぞ！」)

### 1. 1. 8. darn

この短編では、強意表現でしばしば見られる "damn(ed)" の婉曲語として darn が語調を強めるために1回使用されている。この語は変形されて"durn"としても用いられる。<sup>3)</sup>

(19) Howard thought Shirley was a darn good sport. (133)

### 1. 1. 9. What a ....

この表現はそれほど珍しいものではないが、簡潔な感嘆表現として口語英語ではよく使用される。この短編でも、4回用いられているので、次に示す。

(20) And what a name, *Horgenschlag*. (131) (それに、

ホーゲンシュラーグだなんて、何んてへんな名前だこと。)

(21) And what a shame. What a pity that Horgenschlag, in prison, was unable to write the following letter to Shirley Lester: ... (132)

(22) What a mess I made of things, Miss Lester. (132)

### 1. 1. 10. ..., but that's all.

この表現と類似した構文に "..., that's all (it is)." があるが、but が挿入されることによってbut に続く"that's all" がさらに強調されたものと考えて良いだろう。

(23) "... I think people regard me as a nice guy, but that's all." (132)

次の例では all の後ろに、さらに"I am." が付加されて強調の度合いが高まっている。

(24) "... I'm a good printer's assistant, but that's all I am. ..." (132)

### 1. 1. 11. 造語的表現

この短編では、ハイフンを利用した造語的表現が3例見られるので、参考のためにつぎに挙げる。

(25) I was going to write a lovely tender boy-meets-girl story. What could be finer, I thought. The world needs boy-meets-girl stories. But to write one, unfortunately, the writer must go about the business of having the boy meet the girl. (32)

この "a boy-meets-girl story" の表現はもう4回使用されており、この短編のテーマと深くかかわっている。

(26) His cell-mates are Snipe Morgan and Slicer Burke, two boys from the back room, .... (131)

(27) He puts his eight-by-twelve hands around the child's waist and holds her up for the warden to see. (131) (彼は縦12インチ、横8インチの両手をその子の腰に回し、看守長にこれ見よがしにその子を持ち上げる。)

### 1. 1. 12. 省略語法

この短編に見られる主な省略語法を観察しておこう。

(a) 前置詞の省略

(28) I've only been here — I mean in New York — (for) four years. (32)

(29) I have been in New York (for) 4 years and .... (131)

(30) In reference to Shirley's looks people often put it (in) this way: "Shirley's as pretty as a picture." (32)

(31) He could have torn the stocking (in) that way, or succeeded in ornamenting it with a fine long run. (32)

(32) It was all my fault for being so crazy so don't feel (in) that way at all. (131)

(33) Seventeen men and a small blonde child walk out (of) the gates. (131)

(b) 語 (の一部) の省略

(34) "... I hope I don't sound too desperate. ... I suppose I am(desperate), really."(32)/ Shirley agrees that it's kind of cute in a way. Maybe she'll answer it. "Yes! Answer it. Give'm [=Give him] a break. What've [=What have] ya got t'lose [=to lose] ?" So Shirley answers Horgenschlag's letter. (131)

(c) Do you の省略

(35) But he [a guard] misses, and succeeds only in shooting the small man walking nervously behind Slicer, killing him [Justin] instantly.

(Do you) Guess who (was killed) ? (132)

(d) 定冠詞の省略

(36) During (the) play period in the recreation yard, Slicer Burke lures the warden's niece, eight-year-old Lisbeth Sue, into his clutches. (131)

### 1. 1. 1 3. Eye Dialect

この短編では、視覚方言はJustinの刑務所仲間であるSlicerが発話する次の2例だけが用いられている。

(37) "Don't gimme [=give me] that," says Slicer, knocking Horgenschlag's meager food rations to the floor. (131)

(38) "Don't gimme [=give me] that," says Slicer. (131)

### 1. 1. 1 4. Repetition について

2回の繰り返しは珍しくないのに、3回以上の繰り返しについて考察しておこう。(39)ではJustinが一目で夢中になった妖しい魅力を持つ女性 Shirleyを暗示しながら、「わたし」が述べた"femme fatale" (魔性の女) についての意見が紹介されている。

(39) Now, there are two kinds of femme fatale. There is the femme fatale who is a femme fatale in every sense of the word, and there is the femme fatale who is not a femme fatale in every sense of the word. (32)

次の(40)はJustinがShirleyに対する恋の悩みを強調して表明した箇所である。

(40) Horgenschlag saw in her a positive cure-all for a gigantic monster of loneliness which had been stalking around his heart since he had come to New York. Oh, the agony of it! The agony of standing over Shirley Lester and not being able to bend down and kiss Shirley's parted lips. The inexpressible agony of it! (32)

## 2. "The Varioni Brothers" (1943) について

この短編の語り手は Sarah Daley Smith という名の女性で、彼女が17年前に Illinois州の Waycross大学の2年生であった時、音楽関係で若者に人気のあった兄の Sonny Varioniと弟の Joe Varioni のことについて彼女は話を始める。Sonny は主に作曲をし、Joe が作詞をして兄を助けていた。彼らが成功を収めて5年になるのを祝って、出版社主催のパーティーが催されたが、その最中に、2週間前にポーカーの勝負で4万ドルの負債を負って、その借金を払おうとしない Sonnyを狙う殺し屋によって、誤って Joeが殺されてしまう。その後、Sonnyのほうは急に姿を消し、誰も彼の消息を知る者がいない。

Sarah が Waycross 大学の2年生だった時、Joeはこの大学の英文科で教えており、彼が小説を書く才能のあることを Sarahも見抜いていた。しかし当時、Sonnyはもっぱら作曲を行い、作詞のほうは Joeが担当していたので、彼は小説のほうまで手が回らなくなっており、Sarah は Joeの才能を惜しんで、Sonny と別れて、小説を書くことに専念するように Joeに勧める。やがてこの兄弟は Sarahの伯父の紹介で、音楽のエージェントである Teddy Bartoに認められ、シカゴに転居して作詞・作曲活動が続けていく。いくつかの曲が売れ、作詞のほうも多忙になってきたので、Joeの代わりに Lou Gangin という青年が作詞を担当することになりかけた時、Joeが殺されてしまうのである。その後、Sarahは悲しみを乗り越え、教員養成大学に進み、現在は Waycross 大学で教えている。まもなく彼女は Douglas Smith という青年に恋をして結婚し、子供も2人できて、幸せに暮らしているが、Joeが死んで17年後に、Sarahの恩師である Voorhees教授のところに Sonnyがふいに現れて、Joeが断片的に書き残した原稿やメモをまとめて本にしたいと



申し出てくる。Sonny が仕事のできる場所を求めていることを耳にした Sarah は自宅の一部を提供し、彼に協力することにする。

## 2. 1. "The Varioni Brothers"に見られる口語表現について

この短編では、スピーチレベルの低い発話はほとんど見られないが、いくつかの口語表現についてその実態を観察しておこう。

### 2. 1. 1. 軽蔑語法及び強意表現

#### a) crazy

この語は比喩的に「風変わりな、へんな、気違いじみた」などの意で物・事を修飾するのに使用されている。

(41) "I was there on the fatal night their music publisher and friend, Teddy Barto, gave them the handsomest, most ostentatious party of the crazy Twenties. ..." (12)

(42) "At about four A.M. on that festive, frightful morning there were about two hundred of us jammed fashionably in the crazy, boyish basement where the Varionis wrote all their hits. ..." (12)

(43) He'd be reading from some crazy sheets of yellow paper; then all of a sudden he'd cut himself short. "Wait a minute," he'd say. "I changed that." (13)

#### b) rotten

この語も比喩的に「腐敗した；不快な、ひどい、いやな」などの意で用いられている。

(44) Because the inside dope begins there, I must go back to the high, wide and rotten Twenties. I can offer no important lament or even a convincing shrug for the general bad taste of that era. (13)

#### c) lousy

この語は louse の形容詞から派生し、「ひどい、みじめな、不愉快な」の意でしばしば口語英語に見られるものである。次は Sonny が Joe の書いた短編を批評した言葉である。

(45) "He [Joe] showed me a story once. About some kids coming out of a school. I thought it was lousy. Nothing happened." (77)

#### d) dirty

この語は Varioni 兄弟が作詞・作曲した歌の題名「汚

れたペギー」の中で用いられている。

(46) I [Sarah] went with them [the Varioni Brothers] to Chicago the day they sold I Want to Hear the Music, Mary, Mary, and Dirty Peggy. (13)

#### e) awful

この語は Sonny が Voorhees 教授に述べた言葉の中にあり、「lot of」を修飾する強意語として「awfully」の意で使用されている。

(47) Sonny lighted a cigarette, got rid of smoke through thinned lips.

"I'll tell you a secret," he said. "I'm a man who has an awful lot of trouble hearing the music. I need every little help I can get." (77)

### 2. 1. 2. kind of

この表現は、すでに 1. 1. 6. で扱ったように、sort of と同様に口語英語ではよく用いられ、「いくぶん、少し、ちょっと」などの意で口調を和らげるのに使用される。この短編では使用が少なく、Sonny が Joe の原稿を本にしたい意向を Voorhees 教授と Sarah に述べている場面に見られる次の 1 例だけである。

(48) "I'd like to put his book together. Kind of type it up. I'd like to have a place to stay while I do it." He [Sonny] didn't look up at either of us. (77)

### 2. 1. 3. and that crowd ; or what have you

標題の余剰表現は、and all (that), and all that stuff, and everything ; or something, or anything などと類似した表現で、「言及を前の語句だけに限定せず、ほかにも列挙すべきものがあることをほのめかすことによって、表現を曖昧にし柔らかくする」<sup>4)</sup> 働きを持っている。

(49) "Let us say he is a writer. A very fine writer. I believe he has genius."

"Like Rudyard Kipling and that crowd, eh?" (76)

(50) Almost overnight they were financially able to do almost anything — chucking emeralds at blondes, or what have you. (76)

### 2. 1. 4. ..., that's all

この表現は一種の強調表現であり、「..., that's all it is.», 「..., that's what ...», 「...(.) is all.」 や 「...(.) is what it is.」<sup>5)</sup> の他に、1. 1. 10. で扱った形式になることもある。

(51) "I don't want to see him. I just don't want to see him,

that's all. I'm married. I have two fine children. I don't want anything to do with him." (77)

次の(52)のようにこの形式が独立して使用される場合もある。

- (52) "Sonny, he [Joe] can write," I said. "He can really write. I spoke to Professor Voorhees at college — you've heard of him — and when I told him Joe wasn't writing any more, he just shook his head. He just shook his head, Sonny. That was all." (76)

### 2. 1. 5. 造語的表現

この短編では、ハイフンを利用した造語的表現が4例見られ、引き締まった簡潔な文体を形成するのに寄与している。

- (53) "Enter Rocco, Buster Hankey's newest, most-likely-to-succeed trigger man. ..." (12) (「バスター・ハンキーがごく最近に雇った腕利きの殺し屋ロコが登場する。・・・」)

- (54) I happened to be a sophomore at Waycross College, and I actually wore a yellow slicker with riotously witty sayings pen-and-inked on the back, ... (13) (私はちょうどウエイクロス大学の2年生だったが、背中にペンとインクで途方もなく気のきいた言葉を書きつけた黄色いレインコートなんかをほんとうに着ていたのだ。・・・)

- (55) He [Sonny] played a hard, full-chord right hand and the fastest, most-satisfying bass I have ever heard, even from the colored boys. (13) (彼は右手でよく響く豊かな和音を打ち出し、黒人でさえ弾くのを聞いたことがない見事な低音をすごい早さで弾くのだった。)

- (56) ... accusing the Buster of dirty-dealing him. (12) (バスターが彼に汚い手を使ったと非難して・・・)

### 2. 1. 6. Eye Dialect

この短編では、視覚方言はほとんど使用されていないが、2, 3の用例のみ挙げておこう。

- (57) The tipsy blonde — poor thing — points wildly in the direction of the piano. 'Over there, Hansome. But what's your hurry? Have a li'! [=little] drink.'

"Rocco doesn't have time for a li'! [=little] drink.' ..." (12)

- (58) ...,suggesting liberally that sex was the cat's pajamas,

and that we all get behind the ole [=old] football team. (13)

- (59) "That's terrible. When are you gonna [=going to] finish it?" (13)

### 2. 1. 7. a long time

次の例は標題の表現を副詞的に用いたもので、「時間がかかった様子」をtakeなどの動詞を使用せずに、be動詞によって簡潔な言い方にまとめているのが観察できる。

- (60) "What is it you want, Mr. Varioni?" Professor Voorhees asked him deliberately, yet helpfully. "What can we do for you?"

Sonny was a long time (in) making (an) answer. Finally he said, "I have Joe's trunk with his script in it. I've read it. Most of it's written on the inside of a match folder." (77) [前置詞 in の省略例でもある。]

### 2. 1. 8. 省略語法

この短編に見られるいくつかの主な省略語法を眺めておこう。

(a) 前置詞の省略

- (61) Miss MacGregor campused me for a week for hollering out (of) the library window. But I didn't care. Joe waited for me. (13)

- (62) "I teach," Joe said, looking out (of) the window. (13)

- (63) I went with them to Chicago (on) the day<sup>6)</sup> (when) they sold I Want to Hear the Music, Mary, Mary, and Dirty Peggy. (13)

- (64) "You don't even let him play cards (in) his own way." (76)

- (65) "Joe, Joe, sweetheart. Did you write (on) Sunday?" (76)

- (66) "I'm a man who has an awful lot of trouble (in) hearing the music. (77)

(b) 代名詞の省略

- (67) "No," Sonny said, still at the piano.

"You don't need one," Teddy informed. "I'll publish your stuff and I'll be your agent. (You) Look happy. I'm a very smart man. What have you guys been doing for a living?" (13)

(c) 助動詞の省略

助動詞の完全な省略の一步手前の例であるが、よく見られる発話なので次に挙げておく。<sup>7)</sup>

(68) "Chance? What've [=have] you been doing nights?"  
(13)

### 2. 1. 9. those の意の them

この語については 1. 1. 7. でも扱ったが、この短編にも 1 例見られるので、例示しておこう。

(69) "I want all three," Teddy said again, but more impressively. "I want all three of them songs. You guys got an agent?" (13)

### 2. 1. 10. Repetition について

この短編では、2 回の繰り返しが 5 例、3 回の繰り返しが 1 例見られる。通例、2 回目以上の繰り返しでは、新しい語句や節が付加されている。

(70) "He finished it. He finished it that time you went to California with your father. I never let him put it together." (77)

(71) Joe was always too wretched, too thwarted, too claimed by his own unsatisfied genius, to have had either inclination or time to examine, ... (77)

## 3. "The inverted Forest" (1947) について

この作品は初期の作品の中で最も長く、中編と言ったほうが適切なものである。語り手は主人公 Corinne von Nordhoffen の友達で、雑誌記者の青年 Robert Waner である。書き出しは Long Island に暮らす Corinne が 11 歳の誕生日パーティーの前夜である 1917 年 12 月 31 日に書いた日記から始まる。Corinne はヨーロッパの元男爵の娘で、彼女の母は 1915 年に自殺をしており、父は老齢で補聴器をかけているが、存命中である。日記には 1 月 1 日の誕生日パーティーに招待される人の名が挙げられており、その中に Corinne が好意を持っている Raymond Ford という名の貧しい同級生の少年がいる。彼は Corinne のパーティーに呼ばれていたが、ついに姿を見せなかったため、Corinne はその夜の 9 時 20 分過ぎに彼を連れて来るために、車で秘書の Miller 氏と Winona 通りにある彼の家に出かけて行く。Raymond は、乱暴で下品な母親が住み込みで働いているロブスター料理店に住んでいたが、その 2 人は今まさにその店から追い出さ

れようとしているところであった。Corinne と Miller 氏は店から出てきた Raymond とかれの母を駅まで車に乗せて送って行き、2 人が駅の待合室に入って行くのを見守る。

月日が流れ、Corinne が 16 歳の時に、彼女の父が亡くなり、遺産の整理が完了した後、彼女は 17 歳で Wellesley 大学に入る。彼女はすばらしい容姿の持ち主で、内気さの陰にユーモアのセンスもあり、人の秘密は固く守るので寮長にも選ばれ、人の悩みを聞いて助言を与えるという役割を果たしていた。Wellesley 大学を卒業後、彼女はヨーロッパに行き、そこで暮らした 3 年間に多くの男性と知り合うが、その中の 1 人に Detroit 出身の Pat という青年がいた。しかし彼は Corinne の車のステップから落ちて死んでしまう。その後彼女はアメリカに戻り、Philadelphia に 1 カ月滞在した後で、New York 市に移る。やがて彼女は大学時代の友人で、今は雑誌記者をしている、本作品の語り手である Robert に再会し、彼の勤務先である雑誌社に仕事を見つけてもらう。4 年後には、彼女はその職場で編集者であると同時に演劇評論家にもなっていた。

Corinne が独身の 30 歳の誕生日を迎えた時、Robert は彼女に婚約指輪を渡そうとするが、これは断られる。もう 1 つのプレゼントとして『臆病な朝』という詩集を彼女に贈るが、これは受け取ってもらえた。この詩集は彼女がかつて好意を持っていた Raymond が書いたものであり、Robert もそれを絶賛し、その後 Corinne の運命に大きくかかわる書物ともなる。その詩集の中で、特に彼女の印象に残った行は、本作品の表題である "The Inverted Forest" が含まれる次の 2 行である。

Not wasteland, but a great inverted forest  
with all foliage underground. (115)

この詩は T. S. Eliot の『荒地』に対する反発でもあり、「この世はすべて荒地なのではなく、緑の木の葉 — すなわち想像力の世界が陽の当たらぬ地下に埋没し、その中で詩人たちは苦悩しているのである。」<sup>8)</sup>と Warren French は説明する。彼女は詩集のカバーの折り返しを読んで、Raymond が詩作により賞を受けたことや、今 30 歳で New York の Columbia 大学の講師をしていることを知る。さっそく彼女は Raymond に電話をし、大学近くの中華料理店で約 20 年ぶりに再会する。いつもは無口な

彼女も、この時ばかりは饒舌になり、自分の今までの身の上や経験してきたことを何もかも彼に話した。彼の方も彼女に問われるままに、ドッグレースの賭け屋をしていたこと、その時に数千ドルを儲けさせてあげたことで知り合いになった60代半ば過ぎの Rizzio 未亡人のことを述べた。その未亡人は毎晩彼に美しい詩を書いた紙片を渡してくれ、そのことが彼の心に芽生えた詩への興味を一層かきたてることになった。そのうち、この未亡人は自分の書斎を好きな時に来て自由に使ってよいという許可を彼に与えてくれたので、彼は高校を卒業後2カ月間、毎日18～19時間も彼女の書斎で詩を読みふけた。その結果、彼は目を痛めてしまい、さらに自分の無知が悲しくなり大学に行くことにしたのである。

その後4カ月、CorinneとRaymondは週に3回は会い、2人の関係はいよいよ親密度を増し、結婚もまじかに迫って来たように思われた。その間にもRaymondは自分の仕事を進め、2冊目の詩集『回転木馬に乗った男』を出版した。それはCorinneの友人の間でも評判になり、彼は自分の才能を遺憾なく発揮し始めた。そのような時に、RobertからふいにCorinneに電話があり、Raymondが彼女を愛していないこと、そしてひどい精神病にかかっていることを彼女に述べ、2人の結婚を思い留まるようにと忠告する。RobertはRaymondの才能を高く評価しながらも、1人の男性として女性を幸福にできない精神的な欠陥をRaymondが持っていることを直感していたのである。しかしCorinneはRaymondと1937年4月20日にColumbia大学の礼拝堂で結婚式を挙げ、10日間の休暇を取って、カナダへ旅行に出かける。2人が旅行から帰って来た翌日、Raymondのファンだと称するVermont州の女子大生を名取るMary Gates Croftという女性から、自分の書いた詩を読んでほしいという依頼の手紙が届く。Maryは叔母といっしょにいとこの結婚式に行く途中、New Yorkに立ち寄りと言って、RaymondとCorinneのアパートで会うことになる。CorinneはMaryを丁重に扱うが、Raymondの方は無愛想に、詩というものは創作されたものではなくて、発見するものであると述べて、この女性に詩作をあきらめるように言って、部屋を出て行く。その後、Corinneの方はMaryに同情し、彼女を食事や劇場に誘って、慰めてやることに精を出す。それが度重なるうちに、Maryは厚かましく

なって、Columbia大学のRaymondの講義に出たり、Raymondと2人きりで食事に行ったりして、2人の間は急速に接近し始め、最終的に彼女はRaymondを奪って駆け落ちしてしまう。

後半は私立探偵の日記風の形式になり、語り手がRobertからCorinne自身に変更される。RaymondとCorinneとMaryが3人で、1937年5月10日の夜に、劇場に行った日からわずか4日後の5月14日の午後1時10分頃に、RaymondからCorinneへの短い電話を最後に、RaymondとMaryはNew York市を出発する。CorinneもRaymondとMaryの関係に疑いを持ちつつあったが、これほど唐突に2人の関係が進展するとは思ってもみなかったのである。やがて5月23日になって、Maryの夫と名乗る男Howie CroftがCorinneのアパートにやってくる。Maryが女子大生ではなくて、31歳を過ぎた、11歳の子供もいる結婚生活11年目の文学熱に浮かされた女性であることを暴露する。彼はCorinneがショックを受けた様子を見て、慰めの言葉をかけるが、彼女の心の動揺は納まらなかった。しかたなく、Howieも、彼の妻の情報を何も得られずに、Corinneのアパートを立ち去ることになる。

CorinneやRaymondの関係する出版社さらにColumbia大学の関係者が必死になって、Raymondの足取りを捜すが、ようとしてその行方はわからない。それから一年半後に、RobertがRaymondとMaryの住んでいる場所を見つけ出したので、その情報を得たCorinneは単身中西部のある町に列車で向かう。11月のみぞれ混じりの夜、11時を回っていたが、Corinneは2人に電話連絡をした後、タクシーで彼らのアパートを訪れる。部屋の中には、今回の駆け落ちをわびるMaryとCorinneを捨て、社会と断絶したRaymondの落ちぶれた姿があった。Raymondは裸電球が頭上に輝く中で、メガネをはずし、酒に酔いしれ、以前の面影はなかったが、詩作に対する情熱はまだ持ち続けていた。CorinneがNew York市にいっしょに戻ろうと言っても、かれはそれを拒否し、彼女に分けのわからないことを述べるだけであった。Maryは金のために詩を書こうとしない彼をばか呼ばわりし、今では持て余している様子である。Corinneが帰り際に、もう一度彼にNew York市へ戻ろうと誘いかけるが、彼は断わり続ける。やむなくCorinneは2人に



別れを告げ、悲しい思いで彼らのアパートを大急ぎで後にする。

この作品のテーマは地上の世界 [俗の世界] と地下の世界 [想像力の世界] との絶えざる葛藤である<sup>9)</sup>と考えるとよいと思うが、Raymond はその地下の世界でのみ生きられる詩人で、彼がかけていたメガネは現実と唯一の接点を持つことができる手段となっている。Raymond は Mary のいとこが目の体操のために行うようにと言った助言によって、今はメガネを一時的にはずしているが、そのことは現実世界からの逃避を暗示し、たとえ2人の生活が Raymond の詩作にとって、かなりな程度、マイナスに働いたとしても、それによって彼が俗世間との交渉を断ち切って、自分の世界に沈潜することはできているのである。彼が Corinne と結婚することは世間的には幸福なことであるが、彼にとってはその結婚は自己の詩の世界から社交の世界へと引き出されることを表し、その結果それに耐え切れなくなった彼は Corinne の元を逃げ出し、卑俗な Mary との生活に入り込む。<sup>10)</sup> すなわち、Raymond の少年時代に最も影響を与えた母と同種の粗野な女性である Mary の元に走った彼は「外界との交渉をいっさい彼女に委ね、けっこう満足な状態」<sup>11)</sup>にもいるので、Corinne のところには戻らないのである。この作品は詩人対俗世間の緊張関係、言い換えれば innocence と phony の対立のテーマを3人の人物を配して考察したものと考えられる。

### 3. 1. "The Inverted Forest" に見られる口語表現について

この中編では、全体的に多くの口語表現が使用されているが、特に Raymond の母と Mary の夫である Howie Croft の発話はスピーチレベルが低く、口語表現の特徴が顕著に現れている。

#### 3. 1. 1. 軽蔑語法と強意表現

##### a) crazy

この語は「正気でない、まともでない、無分別な」の意で1回だけ用いられている。次の発話は Raymond がドッグレースの賭け屋をしていた時に知り合った Rizzio 未亡人のことを「たいへんな賭け気違いだった」と回想しながら述べている箇所である。

(72) "I saved her a lot of money at the track one evening

— several thousand dollars. She was a heavy, crazy better." (118)

##### b) nuts

この短編では、「気が変な」の意で、Raymond が Rizzio 未亡人に言及して1回と Howie が主に自分の妻 Mary のことについて口癖のように、9回使用している。

(73) "I didn't think it was a gag. I just thought she was nuts." (118) [Raymond の言葉]

(74) "Somethin' else, too," the new man [Howie] said, uneasily. "She kinda drove me nuts."

"What?" said Corinne with respect.

"She kinda drove me nuts," he repeated. "Know what I mean?" (130)

##### c) stupid

この語は Corinne が Raymond と Mary の住むアパートを出て行く時に、Mary が Raymond に述べた呼びかけ語として用いられており、彼女の無遠慮な言葉がかえって彼に対する親愛の情を Corinne にも感じさせる結果になっている。

(75) "Golly, I hope you get a cab all right, Corinne. In this weather. Oh, you'll get one. ... Turn on the hall light for the Corinne, stupid." (132)

##### d) dumn

この語は Raymond の母によって、1回使用されており、自嘲気味に自分のばかさ加減を表明したものである。

(76) "Your husband dead?" he [Miller] asked coldly.

"I was just a beautiful, dumn kid," Raymond Ford's mother mused with affection. (113)

##### e) lousy

この語はすでに2. 1. 1. で扱ったように、「ひどい、みじめな、いやな」などの意で口語英語にしばしば見られるものである。次は Raymond の母が Miller 氏に自分がウエイトレスの職を失った Long Island にあるこの町をいやな場所だと思わないかと同調を求めている箇所である。

(77) "Hey, haven't I [Raymond's mother] seen you in the restront [=restaurant]?"

"I don't believe so," Miller said stiffly.

"Live in this lousy burg?"

"No, I do not."

"Just work here, ah?" (113)

f) snob

この語は Raymond の母が車で駅まで送ってくれた Miller 氏にお礼を言っている場面で使用されているが、自分より上流階級に属する彼に対して、素直になれずに皮肉を込めて発話したものである。

(78) She turned to Miller, saying, "Thanks for the ride, snob," and got out of the car. (113)

g) screwball

この語は「奇人、変人」の意で、Howie が自分の妻と Raymond の駆け落ちを知って、ひどく怒っている時の発話として 1 回用いられている。

(79) "... and I see a letter from Bunny. She tells me her [=she] and this Ford guy are goin' away somewheres together. What a screwball!" He shook his head. (128)

h) damn(ed); darn

これらの語は口語英語で強調のために、しばしば使用される言葉であり、時に非難や嫌悪の含みを伴っていることがある。

次の Raymond の母の発話では視覚方言を使うことによって、彼女の英語のスピーチ・レベルの低さを明示的に表している。

(80) "I'm gonna stop at the damn pleece [=police] station on my way to the station, hear me? A person's entitleda [=entitled to] their property." (112)

次の 3 例は単なる強調のために使用されたものである。

(81) "I come from a damn good family. I had everything. Money. Social position. Class." (113) [Raymond の母の言葉]

(82) "You can go, Rita. I'm all right. I'm damned sick and tired of fainting ...." (128) [Corinne の言葉]

(83) "... I'm makin' one-ten a week now — *plus* expenses, *plus* a darn good bonus every Christmas. It's maybe gone to her head, kinda. Know what I mean?" (130) [Howie の言葉; "darn" は "damn" の婉曲的な変形である。]

i) the hell

この中編では疑問詞の強調として 2 回用いられてい

る。

(84) Suddenly she asked herself aloud: "Who the hell are you, Bud?" (130) [Corinne の言葉]

### 3. 1. 2. 間投詞表現

a) golly, gol-lee

この語は "God" という言葉の代わりに、「おや、まあ、あっ」などの驚き、困惑、強調を表す間投詞として婉曲的に用いられたものである。この間投詞は Mary によってのみ 14 回使用され、彼女の口癖となっており、彼女の無遠慮さや率直さが暗示されている。

(85) "Golly, I hope you get a cab all right, Corinne. ..." (132)

(86) "Corinne! Well, golly! I can't believe it!" (131)

(87) "Gol-lee, Mr. Ford, if my poems aren't — well, at all lovely — I don't know what they are, I mean — golly!" (123)

b) boy

この中編では、「わあ、まあ、本当に」などの驚き、喜び、ショックなどを表す間投詞として 2 回だけ使用されている。

(88) "... Boy, Robert Selridge nearly socked him one." [Lawrence の言葉] (112)

c) honest

この語は「まったく、間違いなく、本当に」の意で、話し手が自分の言葉の真実性を強調して発する表現で、"honest to God", "honest to Goodness" とも言われる。

(89) "Honest!" said Lawrence, as though his integrity were in jeopardy. (112)

d) Hiya

この語は "Hi, you" の縮小されたもの<sup>12)</sup> とか "How are you?" の訛ったものとか言われており、この中編では芝居の名前として用いられている。

(90) "Maybe you could tell me a coupla shows I oughta see while I'm in town. Stage shows. This 'Hiya, Broadway, Hiya!' any good?" (130) [Howie の言葉]

e) hey

この語は「注意を促したり、喜び・驚き・当惑などを表す」<sup>13)</sup> 間投詞で、親しい間柄にしか使用されないが、次の例では、Howie が初対面の Corinne にこの表

現を使って、いかにもなれなれしい印象を彼女に与えている。

(91) "Look, hey. She *can't* be twenty. We got a *kid* eleven years old." ... "Look, hey. What would I lie for? I mean what would I lie for? How old did *she* tell you she was?" ... "Look, hey. I come home on Thursday. From this special trip I hadda make for the firm. ..." (128)

### 3. 1. 3. kiddo

この表現は相手に親しく呼びかける時に使用され、次の例では父の秘書である Miller 氏が Corinne に親愛の気持ちを含めて、「お嬢さん」と呼びかけている場面で用いられている。

(92) "Twenty past nine, Baron," Miller turned to Corinne. "What's it gonna be, kiddo? You wanna look for this boy or not?" (112)

### 3. 1. 4. I mean

この表現は会話文の中で21回使用されており、そのうち7回は Corinne の発話に、9回は Mary の発話に見られ、付け足しや念押しをしながら話を進める2人の特徴がこの表現によって、表されている。また発話の中に繰り返し文を含んだり、余剰表現やイタリック体となった語句を伴って強調効果を高めていることも多い。

(93) "... I wish we could all write to each other or something. I mean, *you* know. Are you still at the same place in New York?" (132)

(94) "Oh, I guess I won't really quit. I mean, not really." (124)

(95) "... I know that isn't the right word. I mean, the right word." (116)

(96) "... I've forgot about it already. She just changed a lot. I mean she just changed a lot. ..." (130)

### 3. 1. 5. those の意の them

すでに 1. 1. 7. でも扱ったがこの作品でも1例見られるので、次に挙げておく。

(97) "Mother, c'mon. Please," Raymond Ford said. "Can'tcha see he's not gonna give 'em to ya?" "I want them galoshes." (113)

### 3. 1. 6. or something, or anything; and all

標題の余剰表現は、すでに 1. 1. 4., 2. 1. 3. で扱ったように、これらの句を付け加えることによって、

表現を曖昧にし、コミュニケーションを滑らかにする働きを持っている。この作品では、会話文で、or something が7例、or anything が3例、and all が4例、and stuff が2例、and all that が1例、or somebody が1例、or somewheres が1例、or what<sup>14)</sup> が1例、地の文で and everything else が1例用いられている。

(98) "What is he, the Frank Merriwell of his class or something?" (112) [Frank Merriwell は米国の作家 Gilbert Patten (1866-1945) が書いたスポーツ小説 *Mr. Frank Merriwell* (1941) に登場する大学の運動選手の名前]

(99) "It's not at all late. You've got to come over here this minute. You're not in bed or anything?" (131)

(100) "Why don't you try to be very careful? That is, about me and all." (119)

(101) "... I won't say it in front of — I don't know — the chow mein and stuff. ..." (117)

(102) "... Her face was pretty jaded and all that, but ...." (118)

(103) "You know a Miss Craft or somebody?" she demanded. (127)

(104) "Look, I don't live on Park Avenue or somewheres. ..." (128)

(105) At that point Corinne let go of the doorknob — and everything else. (130)

### 3. 1. 7. sort of; kinda

この表現もすでに 1. 1. 6., 2. 1. 2. で扱ったように、口語英語ではよく用いられ、この作品では、会話文に sort of が2例、kinda が3例見られる。

(106) "... She sort of wanted me to become a movie actor, I think." (118)

(107) "I thought your husband could kinda [=kind of] show her the ropes." (129)

[「種類」の意を表す kind も1例だけ使用されている: "Her drinkin' buddy. Teachers at the high school. Durant and Bunny talk about all that kinda stuff." (129)]

### 3. 1. 8. attagirl

この表現は女性に対して "attaboy" の代わりに用いられ、「いいぞ、よくやった、その調子」の意で（主に米略式）で用いられ、"That's the girl." のなまったものと

言われている。<sup>15)</sup>

この作品では, "Atta girl" として 1 回だけ使用されている。

(108) "Say 'Howie.' "

"Howie," Corinne said.

"Atta girl. Yeah. She kinda drove me nuts sometimes." (130)

### 3. 1. 9. 数の不一致

通例, 方言や砕けた口語表現では, 単純化語法の一環として, does が do に統一される傾向がある。次の発話は Howie が Corinne に述べた言葉である。

(109) "Your husband makes a lot of dough writin' books, don't he?" (129)

### 3. 1. 10. 目的格主語

単純化語法の 1 つとして, 目的格が主語に用いられることがある。次の発話では, それぞれの登場人物が視覚方言と言っても良いぐらいの, だらしない言葉づかいをしていることが, "athalete", "finly" の綴りを使用することによって表されている。

(110) "The school athalete [=athlete]. You know. All the gals after him. The demon of the cinder path, the — "  
" (Is) Him [=he] an athalete [=athlete]?" interrupted Lawrence Phelps. (112)

(111) "... And so finly [=finally] I look in the mailbox and I see a letter from Bunny. She tells me her [=she] and this Ford guy are goin' away somewheres together. ..."(128)

### 3. 1. 11. 目的格に代わる主格

この作品では次のように, and によって代名詞が並記された場合に, me の代わりに I が用いられている。ここでも 3. 1. 10. で述べたように, だらしない言葉づかいが "strickly" の綴りを使用することによって表されている。

(112) "... Strickly [=Strictly] between you and I [=me] and the lamppost, I and Bunny haven't been gettin' along so good. We haven't been getting along so good the last coupla years. ..." (130)

### 3. 1. 12. all the ways

アメリカ口語英語では "all the way" の代わりに "all the ways" が使用される。これは "a long ways" や "quite a

ways" などにも見られ, ways の形を用いて副詞句を構成している。

(113) "Certainly I knew she was comin' here. You don't think I'd let her come all the ways to New York without knowin' what's what, do ya?" (128) [ what's what はイギリス英語においても, 「(物事の) 真相, 事情; 道理」などの意で使用される口語英語である。]

### 3. 1. 13. 接続詞の on account of

群前置詞の on account of が接続詞として because と同じ意で使われることがある。この用法は「本来は南部アメリカ英語特有の表現であったが, 逐次 New York, Chicago などの大都市に広がって行った」<sup>16)</sup> と言われている。またこの用法には, of が省略された on account や on の省略された account of さらには, on も of も省略され, account のみが使用された例もあり, この表現の持つ柔軟性, 融通性に対しては目を見張るものがある。

(114) Miss Aigletinger said I had to invite Lawrence Pheleps on account of Marjorie is coming. I have to invite Mr. Miller on account of he works for father now. (111)

### 3. 1. 14. ..., that's all.

この表現はすでに 2. 1. 4. で扱ったように, 強調表現の一種である。この作品では, 次の 2 例が見られる。後者は, "that" が省略された形式になっている。

(115) "He'll marry you," he [Waner] said.

"Really. Why?"

"Because he just will, that's all. He likes you and he's cold and ...." (121)

(116) I don't want Raymond Ford to give me anything for my birthday just so he comes (, that) is all. (111)

上の(116)の文は Corinne が 11 歳の誕生日の前日に書いた日記の中に見られるものである。

### 3. 1. 15. 接続詞 like

接続詞の like は口語英語ではそれほど珍しい用法ではないが, (118) に見られる like=as if の場合はイギリスでは非標準的と感じられている。<sup>17)</sup>

(117) He has this brother in Florida that has alligators and T. B. like Miss Calahan had. (111) [Corinne の 11 歳の誕生日前日の日記の文]

(118) I got Raymond a real cow boy hat to wear just like



that cow boy he likes wears. (111) [Corinne の11歳の誕生日前日の日記の文]

次の例は口語英語の典型とも考えられるが、引用文の前で用いられ、「(・・・という) 感じがして、(・・・というようなことを) 言って」の意を表している。

(119) ... Corinne was entirely apt to break in with some terrible remark like, "If we hurry we can catch the twelve thirty-one instead of the twelve forty. Do you feel like running?" (114)

### 3. 1. 16. 副詞 like

副詞の like は文頭や文尾に置かれて、断言を避けるためにしばしば用いられるが、文中に置かれて、つなぎの言葉として、ためらいの気持ちが表されることもある。この作品では4例見られる。

(120) "Her Aunt Agnes never shoulda let her go. It warped her mind, like." (130)

(121) "Lawrence saw his back at Doctor's Hour. It's all things all over it. Big awful marks, like." (112)

### 3. 1. 17. 接尾辞 -like

この用法は通例、形容詞や名詞の語尾に接尾辞 -like を付加して、「(いわば、どうも、なんだか)・・・のような」などの意味を発話に添える機能を持っている。

(122) "I [Howie] let her go on trips once in a while. Just to break up the monotony, like. But if you're inferring-like that I let her chase around— " (129)

(123) He [Howie] grinned at Corinne. "Don't look so worried-like," he recommended. (130)

### 3. 1. 18. this の冠詞的用法

この用法は単に不定冠詞の a や定冠詞の「the を用いるより、this の持つ空間的距離の近さと指示性の強さを生かして、・・・相手との距離感をなくし相手の関心を自分に引き寄せる効果がある」<sup>18)</sup>と考えられる。

(124) "Bobby, who is this Ray Ford?"

"Who?"

"Ray Ford. The man who wrote the poems you gave me." (115)

(125) Mr. Miller is going to give me an alligator. He has this brother in Florida that has alligators and T. B. like Miss Calahan had. (111)

(126) "Well, let's go get this boy. No use sittin' around mopin' about it all night. ..." (111)

### 3. 1. 19. 誤った綴り

Salinger の作品には、時に視覚方言に近い誤った綴りが使用されることがある。その使用者は子供であったり、場合によっては大人であることもあるが、後者の場合は登場人物のスピーチレベルの低さを明示的に表すためであると思われる。

(127) I love him better then [=than] my father. ... Please dear lord dont [=don't] let Lawrence Pheleps be mean at my party and .... (111) [Corinne の11歳の誕生日前日の日記の文]<sup>19)</sup>

(128) "The school athalete [=athlete]. You know. All the gals after him. The demon of the cinder path, the — "

"Him an athalete [=athlete]?" interrupted Lawrence Phelps. (112) [前者は11歳の誕生日前日のCorinne の発話；後者はCorinne の誕生日に来てくれた子供のお客の発話]

上の(128)に見られる"athalete"はathleticの視覚方言"athaletic"に類似していることがわかる。

(129) Father is also going to give me more room in the kennles [=kennels] for Sandys [=Sandy's] puppys [=puppies] and .... (111) [Corinne の11歳の誕生日前日の日記の文]

(130) "I toldya," said the cigar. "The restront's [=restaurant's] locked. And it's gonna stay locked the whole time the boss is at his brudda's [=brother's] funeral. Listen. You had all affernoona [=afternoon to] pick up ya [=your] galoshes." (112) [葉巻を吸っている男の発話]

(131) She sounded suspicious. "How come you're ridin' around in this tin lizzy [=lizzie]? Where's all the lemazeens [=limousines]?" (113) [Raymond の母の発話]

(132) "... She keeps yellin' over the phone about how she hasn't strength enough to take care of the kid and where's his mother anyways, and so finly [=finally] I hang up. ..." (128) [Howie の発話; finally の視覚方言は通例 finly と綴る。]

(133) "Well, ten years and eight months, if you wanna be

so eggzact [=exact]," he said. "Cigarette?" (128) [Howie の発話]

(134) "Corinne. Well, I tellya, Corinne. Strickly [=Strictly] between you and I and the lamppost, I and Bunny haven't been gettin' along so good. ..." (130) [Howie の発話]

### 3. 1. 20. Eye Dialect

視覚方言は「話者が非標準的な発音をしていることを視覚的に表そうとしたもの」<sup>20)</sup>で、スピーチ・レベルが低いほど、その使用が多くなる傾向がある。この作品では、主に、Raymond の母と Howie の発話にこの表現が多く見られる。

#### a) to 不定詞の to の同化現象

この現象は口語英語の顕著な特徴であり、wanna, gonna, hadda の他に wansta, supposta, supposa, oughta などが見られる。

(135) "Call me Howie," he suggested. "Unless you wanna [=want to] stand on this ceremonies stuff." (128) [Howie の発話]

(136) "I was just gonna [=going to] clean in there. I haven't cleaned in there yet." (127) [Corinne のアパートのお手伝い Rita の発話]

(137) "Look, hey. I come home on Thursday. From this special trip I hadda [=had to] make for the firm. I look around the house. No Bunny anywheres. ..." (128) [Howie の発話]

(138) "I said, Chick the doorman's on the house-phone," Rita said. "He says there's a gentleman in the lobby wansta [=wants to] see you." (127) [Corinne のアパートのお手伝い Rita の発話]

(139) "... Even though she was supposta [=supposed to] be back at least a week awreddy [=already]. (128) [Howie の発話；視覚方言では awreddy は awready と綴られる。]

(140) "Yeah," said the cigar, and got even redder. "You ain't supposa [=supposed to] leave no galoshes in no kitchen. *You* know that." (112) [葉巻を吸っている男の発話]

(141) "Maybe you could tell me a coupla shows I oughta [=ought to] see while I'm in town. ..." (130) [Howie の発話]

話]

#### b) 前置詞 to の同化現象

この現象は entitleda, tickleda の 2 例において見られる。

(142) "Listen," said the lady with Raymond Ford. "I'm gonna stop at the damn pleece [=police] station on my way to the station, hear me? A person's entitleda [=entitled to] their property." (112) [Raymond の母の発話；"pleece" は通例 place の視覚方言であり、police の視覚方言は perlice と綴られるのが普通であるので、Raymond の母の発話はかなりなまった発音を文字化したものと考えられる。]

(143) "... He'd [Dad'd] be tickleda [=tickled to] death. I'd make him the happiest Dad in the world." (113) [Raymond の母の発話]

#### c) 前置詞 of の同化現象

前置詞 of の弱音化された発音 /ə/ を文字化して、その綴り字を a にしたものである。

(144) "I meant Ford — I know a coupla [=couple of] people named Field." (128) [Howie の発話]

(145) "She's got an Aunt Agnes," he suggested constructively. "Got a lotta [=lot of] dough, too. Runs the movie house over at Cross Point." (129) [Howie の発話]

(146) "If ya feet get cold, break open one a [=of] them [=those] bagsa [=bags of] yours," suggested the cigar. (113) [葉巻を吸っている男の発話]

(147) "Let's get otta [=out of] here before I get mad," she told him. (113) [Raymond の母の発話]

(148) "He jumped outa [=out of] the way. Honest! He wouldn't even chase it afterwards. ..." (112) [Lawrence Phelps の発話]

#### d) 助動詞 have の同化現象

この現象は have の音韻消失 /həv/ → /əv/ → /ə/ の結果、その後、残った /ə/ が前の子音に同化したものである。

(149) "Her Aunt Agnes never shoulda [=should have] let her go. It warped her mind, like." (130) [Howie の発話]

(150) But he shook his head. "If I'd known this I wouldn'ta [=wouldn't have] let her come." (129) [Howie

の発話]

e) 代名詞 ya [=you]の同化現象

この現象には ya/jə/ の前にある子音 /t/の影響を受けて、2つの音が同化した場合とyaの前にある子音が /t/ 以外の音と同化した場合の2種類が見られる。

(151) Howie Croft didn't hear her. "I don't getcha [=get ya]," he said, and cupped his ear. "Say that again."

(128) [Howieの発話]

(152) "Mother, c'mon. Please," Raymond Ford said.

"Can'tcha [=Can't ya] see he's not gonna give 'em to ya?" (113) [Raymondの発話]

(153) "Listen, you. Stay otta the discussion," she ordered.

"When I'm innarested in your two cents I'll letcha [=let ya] —" (113) [Raymondの母の発話]

(154) "I toldya [=told ya]," said the cigar. "The restront's locked. ..." (112) [葉巻を吸っている男の発話]

(155) "I mean what I toleya [=told ya]. You let that bag flop open like last time, and I'll break your back." (113)

[Raymondの母の発話]

(156) "Well. I tellya [=tell ya] — what's your first name anyways?" (130) [Howieの発話]

f) その他の視覚方言

よく知られた視覚方言 "leggo [=let go]"(113), "lemme [=let me]"(115) 以外に、この作品では、次の表現が用いられている。

(157) He gulped down the last of his highball. Then, with an ice cube clicking in the side of his mouth, inquired, "Wuss your firs' 'ame [=What's your first name], anyways?" (129) [Howieの発話; "wuss"は通例 worse や worth の視覚方言であり, what's の視覚方言は "whass", "wuz"と綴られるのが普通であるが、この作品では類推によるのであろうが, "wuss" が用いられている。ちなみに, what の視覚方言は通例 "whut", "wut", "whar" と綴られている。<sup>21)</sup>

(158) "When I'm innarested [=interested] in your two cents I'll letcha —" (113) [Raymondの母の発話; interestedの視覚方言は通例 "int'rested", "innerrested" と綴られ, interestの視覚方言の名詞と動詞は "intrust", "int'res'" と綴られている。<sup>22)</sup>

(159) "Mr. Croft, has your wife ever gone off like this

before?"

"Hoddaya [=How do you] mean?" he asked, beginning to chew the ice cube in his mouth. (129)

[Howieの発話]

(160) "I mean," Corinne said with control, "has she ever gone on trips with men?"

"Lis-sen [=Listen]. Wuddaya [=What do you] think I am — a fool?" (129) [Howieの発話; "wuddaya" はしばしば用いられる視覚方言である。]

### 3. 1. 2 1. haveの意のof

アメリカ口語英語によく見られるが、haveの弱音発音 /əv/とofの発音 /əv/が一種の同音異義語を形成して、書き言葉の場合、「わざとくだけた感じを出すためにhaveをofと綴ることがある。」<sup>23)</sup> この作品では1例使用されている。

(161) "I'm sure sorry to of [=have] scared you that way, Mrs. Field." (128) [Howieの発話]

### 3. 1. 2 2. 造語的表現

この作品でもSalingerはハイフンを利用した造語的表現を多用しているが、名詞に "-y" を付加して形容詞として使用した語も1例ある。

(162) Miss Aigletinger leaned forward, a committee-of-one for smooth-running birthday parties.(111) [a committee-of-one は the committee of one 1人委員会 (◆1人で委員会の仕事をすべてするように任命された人) から派生した語; smooth-runは「・・・を円滑に進める」の意]

(163) It was the sort of thing that can play hell with a man-going-to-Yale-next-year's Saturday night. (114) [play hell withは play the devil withとも言う口語表現で、ここでは「・・・をめちゃくちゃにする」の意; 下線部の表現は「来年はイェール大学に入学することになっている人の」の意]

(164) She prescribed for herself some of the usual American-in-Europe neurotic fun,... (114) [下線部の表現は「ヨーロッパにいるアメリカ人の」の意]

(165) Nobody, of course, can make the American rich feel quite as filthy as can a poor-but-clean European. (114) (もちろん、誰もその金持ちのアメリカ人(娘)に、貧しいが清潔な暮らしをしているヨーロッパ人が感じ

るような、不快な気持ちを抱かせることはできない。)

(166) The young man from Detroit had first approached her on a like-me-like-the-books-I-read basis, and she was now a heavy reader. (114) (デトロイト出身のその青年が、僕の読んでいる本のように僕を好きになって欲しいと言って、彼女に最初近づいて来たが、彼女は今は、読書が一番の楽しみになっていた。)

(167) "... You're the greatest hat-straightener that ever lived." (120) (「・・・あなたほど帽子をまっすぐに直す人はいないよ。」)

(168) As she looked at her new husband's handsome, Monday-morning-go-to-work-for-the-first-time face, her trend of thought drifted away from her. (122) (彼女が新郎の整った、初めて仕事に出かける月曜日の朝の顔を見た時に、彼女の頭から自分の考えの方向がそれていった。)

(169) Wesley Fowler incessantly one-fingering the keyboard of the piano, ... (124) (ウェズレー・ファウラーは絶え間なく1本指でピアノの鍵盤をたたき続けて、・・・)

(170) A neon sign across the un-New York-looking street cast its ugly blue reflection on the black wet street. (131) (ニューヨークとは違う感じの街路の向こう側にあるネオンサインが、黒くぬれた通りにその醜い青い影を投げかけていた。)

(171) An undressed watty little bulb burned over his head. (131) (小さな裸電球が頭上に輝いていた。)  
["watty"<sup>124</sup>は "watt" ((電力の単位の) ワット) に "-y" が付加されて造語された形容詞]

### 3. 1. 23. My trouble is, ...

口語英語では、話の切り出しとして、"The thing is, ..." や "The trouble is, ...", "What I did was, ..." などの副詞節の一種が用いられ、聞き手の注意を喚起することが知られている。<sup>25)</sup> 標題の発話はこれらと同類の表現である。次の例では、"... , was my trouble." の文が付加されて、強調されていることがわかる。

(172) "My trouble is, I married beneath me. I married a chap that was way beneath me, was my trouble. ..." (113) [Raymondの母の発話]

### 3. 1. 24. 副詞 on

口語英語では、話し手の意志を強調するために、副詞 on の追加がよくみられる。次の例では on のある場合とない場合が対照されて用いられている。

(173) "Swell. ... Well, we're dying to see you. You hurry on up, now."

For a few seconds Corinne couldn't talk at all.

"Corinne? You there?"

"Yes."

"Well, you hurry up, now. We'll be waiting. G'by!"

(131)

### 3. 1. 25. 2重 [3重] 否定

標題の表現も口語英語ではしばしば見られる現象であり、1つの否定を強調したものである。<sup>26)</sup> この作品でもいくつか用いられているので次に示しておく。

(174) "And that year she went to college didn't do her no good — any good," Howie Croft pointed out. (130) [最初に no good と行って、次に any good と言い直している点に注意したい。]

(175) "You ain't supposa leave no galoshes in no kitchen. You know that." (112)

### 3. 1. 26. 副詞 way

この副詞 way の持つ強調機能は珍しくないので1例だけ挙げておこう。

(176) "... I married a chap that was way beneath me, was my trouble. ..." (113)

### 3. 1. 27. 接続詞 the way

周知のように、この用法は in the way の in の省略によって、the way が副詞化し、それがさらに接続詞化して多くの機能を発展させたものである。次の例ではそれぞれ接続詞 as に置き換えることができる。

(177) "... People with small bones don't get old the way people like you and I. Know what I mean?" (128) [Howieの発話]

(178) She could feel her pulse beating close to her ear, the way it does when the face is pressed against the pillow (in) a certain way. (131)

### 3. 1. 28. 省略語法

この語法もすでに 1. 1. 12., 2. 1. 8. で扱ったが、この作品でもいくつか見られるので、その主なものを観察しておこう。<sup>27)</sup>



(a) 前置詞の省略

- (179) "You mustn't feel (in) that way," she ordered uneasily. (124)  
 (180) Corinne's hands were folded on the table, (in) classroom style. (118)  
 (181) Howie Croft laughed. "Sure. We been married (for) eleven years," he said. (128)

(b) 語の一部の省略

この省略には、よく知られた "c'mon"(113)=come on, "G'by"(131)=Goodby, "Good ni="(115)=Good night, "older'n"(128)=older than, "t'keep"(113)=to keepなどの他に次のような例が見られる。

- (182) "Corinne," rebuked Mr. Miller, removing his finger from his mouth. "Is 'at [=that] nice?  
 "Tell 'em [=them] about his back," Marjorie Phelps suggested to her brother. (112)  
 (183) "Please don't go so fast."  
 "What's 'at [=that]? Somebody scared?" (112)

- (184) "Wuss [=What's] your firs' 'ame [=first name], anyways?" (129)

(c) 助動詞の省略

- (185) "Sure. We (have) been married eleven years," he said. (128)  
 (186) "...You know how many books she's wrote [=has written] since we (have) been married? ..." (129) [Howieのこの発話ではwroteを過去分詞として使用している。]

(d) Do youの省略

- (187) "(Do you) Live in this lousy burg?" (113)/"(Do you) Know what I mean?"(130)

(e) It'sまたはThere'sの省略

- (188) "Well, let's go (and) get this boy. (It's [There's]) No use (in) sittin' around mopin' about it all night. Where's [=Where does] he live, birthday girl?" (111)

次の例も話の内容が話し手と聞き手には了解されているので、文の主語と述語動詞は省略されている。

- (189) "It's (on) this street," Corinne said excitedly. "(It's) Right here, please —"  
 "Where (is it)?" said Miller.  
 "You passed it!" (112)

3. 1. 29. Repetitionについて

この現象についても、すでに1. 1. 14., 2. 1. 10. で扱ったが、ここでも少し触れておこう。繰り返しによって、それぞれの表現が強調されることは言うまでもないが、繰り返しの伴って、余剰表現や強調表現が付加されることもしばしば見られる。3回以上の繰り返し例のみ次に挙げておこう。最初の(190)ではWanerが好意を持っているCorinneが帽子を整える時の仕草や振る舞いを強調して、ほめている場面である。

- (190) "There was something about the way you raised your arms to straighten your hat, and the way your face looked in the mirror over the driver's photograph. I don't know. The way you looked and all. You're the greatest hat-straightener that ever lived." (120)

次の例では、Howieが自分の妻の心が変わってしまい、自分や子供に対して邪険な行動を取るようになってしまったことをCorinneに切々と訴えているところである。

- (191) "It wasn't too bad when we first got married. But— I don't know. She got funny pretty quick. Mean. Mean with me. Mean with the kid, even. ... It don't [=doesn't] matter anymore, anyways. I've forgot about it already. She just changed a lot. I mean she just changed a lot. Boy! ...." His mouth tightened; he was almost finished. "I don't know. She just changed a lot." He was finished. (130)

最後の例はCorinneが駆け落ちした夫とMaryの居場所を知って、その町に出かけて行き、あるホテルに宿泊手続きをし、その部屋で、もう午後11時であり、夫に電話をかけるには時間が遅過ぎるのではないかと思案している場面である。

- (192) She saw almost with delight that it was eleven o'clock at night. She felt saved. It was much too late to do any phoning. It was much too late to tell her husband all she had learned about Bunny from Howie Croft. It was much too late to find out if her husband needed money. It was much too late to hear his voice. It was exactly the right time to take another hot bath. (130)

3. 1. 30. 形容詞 open

形容詞 open が burst, kick, pull, push, throw などの動詞と共に用いられて、「<戸など>を・・・してあける」の意に使用される場合があり、この作品では2例みられる。

(193) "If ya feet get cold, break open one a them bagsa yours," suggested the cigar. (113) [break openは「壊してあける」の意]

(194) "Now, listen," she said to him. "I mean what I toleya. You let that bag flop open like last time, and I'll break your back." (113) [flop openは「ドスンと落としてあける」の意]

### 3. 1. 3 1. *Nine Stories*や*Franny and Zooey*に生かされた描写

*Nine Stories* (1953)の "Just Before the War with the Eskimos" や "Down at the Dinghy" さらに *Franny and Zooey* (1961)に生かされることになったと思われる表現を最後に併記しておこう。

(195) Mr. Miller, inserting the nail of his little finger between two molars, shook his head. (112) [ He inserted the nail of his uninjured index finger into the crevice between two front teeth and, removing a food particle, turned to Ginnie. — "Just Before the War with the Eskimos" in *Nine Stories* (Boston: Little, Brown and Company, 1953), p.67.]

(196) ... Howie Croft moved uneasily over to the red-damask chair Corinne had vacated. (128)[ He then sat down in a red damask chair, crossed his legs, and put his hands to his face. — "Just Before the War with the Eskimos" in *Nine Stories*, p.75.]

(197) Corinne felt her cigarette burning hotly close to her finger. She unloosened the cigarette over an ash tray. (129) [ Her cigarette was angled peculiarly between her fingers; it burned dangerously close to one of her knuckle grooves. Suddenly feeling the heat, she let the cigarette drop to the surface of the lake. — "Down at the Dinghy" in *Nine Stories*, p.127.]

(198) Mrs. Ford said again that she thought Mr. Ford had been drinking. Mr. Ford, successfully unlocking his front door, stated in a loud voice that he had eaten an olive from "her" Martini. Mrs. Ford, trembling, asked

from whose Martini. "From her Martini," Mr. Ford repeated. (126-127) [ "You going to eat your olive, or what?" Lane gave his Martini glass a brief glance, then looked back at Franny. "No," he said coldly. "You want it?" "If you don't," Franny said. She knew from Lane's expression that she had asked the wrong question. What was worse, she suddenly didn't want the olive at all and wondered why she had even asked for it. There was nothing to do, though, when Lane extended his Martini glass to her but to accept the olive and consume it with apparent relish. — *Franny and Zooey* (Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books Ltd, 1968), pp.16-17.]

全体的には、*Nine Stories*や*Franny and Zooey*の方が場面描写がより詳細になり、また表現においても重層的で豊かな文体を構成していると考えられる。

## 4. おわりに

[J. D. Salingerの初期の短編について (1) ~ (6)] (平10年2月, 平14年9月, 平15年2月, 平15年9月, 平16年2月, 平16年9月)において、今では、原文を手に入れることが難しい Salinger の初期の作品21編 (中編1編, 短編20編)に見られる口語表現の特徴を吟味しながら、登場人物の行動や考え方を考察した。ここにそれら21編の表題を再掲する。

(A) 若者たちをめぐる作品 — 8編

(1) "The Young Folks" (*Story* 16, 1940)

(2) "Go See Eddie" (*University of Kansas City Review* 7, 1940)

(3) "The Long Debut of Lois Taggett" (*Story* 21, 1942)

(4) "Both Parties Concerned" (*The Saturday Evening Post* 216, 1944)

(5) "Elaine" (*Story* 26, 1945)

(6) "A Young Girl in 1941 with No Waist at All" (*Mademoiselle* 25, 1947)

(7) "A Girl I Knew" (*Good Housekeeping* 126, 1948)

(8) "Blue Melody" (*Cosmopolitan* 125, 1948)

(B) *The Catcher in the Rye* の先駆けとなる作品 — 2編

(9) "I'm Crazy" ( <i>Collier's</i> 116, 1945)	4-1	造語的表現	[21編中15編に見られる]
(10) "Slight Rebellion off Madison" ( <i>The New Yorker</i> 22, 1946)	4-2	Eye Dialect	[21編中15編に見られる]
(C) 戦時下の人々を扱った作品 —— 8編	5-1	Repetition	[21編中14編に見られる]
(11) "The Hang of It" ( <i>Collier's</i> 108, 1941)	5-2	I mean	[21編中14編に見られる]
(12) "Personal Notes on an Infantryman" ( <i>Collier's</i> 110, 1942)	6	kind of, sort of	[21編中12編に見られる]
(13) "Soft-Boiled Sergeant" ( <i>The Saturday Evening Post</i> 216, 1944)	7	to不定詞の to の同化現象	[21編中9編に見られる]
(14) "Last Day of the Last Furlough" ( <i>The Saturday Evening Post</i> 217, 1944)	8	誇張表現	[21編中8編に見られる]
(15) "Once a Week Won't Kill You" ( <i>Story</i> 25, 1944)	9-1	間投詞 boy	[21編中7編に見られる]
(16) "A Boy in France" ( <i>The Saturday Evening Post</i> 217, 1945)	9-2	..., that's all とその類例	[21編中7編に見られる]
(17) "This Sandwich Has No Mayonnaise" ( <i>Esquire</i> 24, 1945)	9-3	2重否定	[21編中7編に見られる]
(18) "The Stranger" ( <i>Collier's</i> 116, 1945)	9-4	ain't の使用	[21編中7編に見られる]
(D) 作家の問題を扱った作品 —— 3編	10-1	thisの冠詞的用法	[21編中6編に見られる]
(19) "The Heart of a Broken Story" ( <i>Esquire</i> 16, 1941)	10-2	the way の接続詞的用法	[21編中6編に見られる]
(20) "The Varioni Brothers" ( <i>The Saturday Evening Post</i> 216, 1943)	10-3	単純化語法	[21編中6編に見られる]
(21) "The Inverted Forest" ( <i>Cosmopolitan</i> 123, 1947)	11-1	副詞 like	[21編中5編に見られる]
これを見ると、初期の作品を多く発表している年は1944年(4編)と1945年(5編)であることがわかる。1948年には、2編を発表しているが、後に <i>Nine Stories</i> に収められることになる短編3編を別に発表しているので、この年も合計5編ということになる。また前にも述べたように、結末にオチ (surprise ending) を持つ "a short short story" は "The Hang of It" と "Personal Notes on an Infantryman" の2編であり、"The Inverted Forest" は中編と呼んでもいい作品である。さらに、Salinger の初期の作品21編で、口語を主体とした文体を特徴づける表現形式を使用頻度順にまとめると次のようになる。	11-2	those の意の them	[21編中5編に見られる]
1 省略表現	11-3	No の強調	[21編中5編に見られる]
2 or something, and all とその類型	12-1	前置詞 of の同化現象	[21編中4編に見られる]
3-1 軽蔑語法	12-2	2重主語	[21編中4編に見られる]
3-2 誓言・間投詞・強意表現	13-1	<i>Nine Stories</i> に生かされた表現	[21編中3編に見られる]
	13-2	this here	[21編中3編に見られる]
	13-3	接続詞 like	[21編中3編に見られる]
	13-4	目的格主語	[21編中3編に見られる]
	13-5	The trouble [thing] was, ...	[21編中3編に見られる]
	13-6	kiddo	[21編中3編に見られる]
	13-7	注意の喚起法	[21編中3編に見られる]
	14-1	助動詞 have の同化現象	[21編中2編に見られる]
	14-2	助動詞 have の意の of	[21編中2編に見られる]
	14-3	前置詞 like	[21編中2編に見られる]
	14-4	I says ....	[21編中2編に見られる]
	14-5	(on) account of の接続詞的用法	[21編中2編に見られる]

表現形式 \ 作品名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計	
省略表現	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	21
or something, and all	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
軽蔑語法	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	19
誓言・間投詞・強意表現	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	19
造語的表現	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○				○	○	○	○	○	15
Eye Dialect	○		○	○			○	○	○	○	○		○		○		○	○	○	○	○	○	15
Repetition		○	○	○					○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
I mean	○	○	○	○	○	○				○			○	○	○		○	○	○			○	14
kind of, sort of		○	○			○		○	○				○	○			○	○	○	○	○	○	12
to不定詞のtoの同化現象	○			○	○	○	○	○		○				○			○						9
誇張表現			○	○					○				○		○	○		○	○				8
間投詞 boy			○						○	○	○			○			○		○				7
..., that's all			○							○		○					○		○	○	○	○	7
2重否定				○			○	○			○		○				○					○	7
ain'tの使用				○			○	○			○		○				○					○	7
thisの冠詞的用法	○	○		○													○	○				○	6
the wayの接続詞的用法		○	○						○				○	○								○	6
単純化語法			○	○							○		○				○					○	6
副詞 like			○				○						○				○					○	5
thoseの意のthem													○				○		○	○	○	○	5
Noの強調	○			○				○						○			○						5
前置詞ofの同化現象	○							○									○					○	4
2重主語			○										○	○			○						4
Nine Storiesに生かされた表現	○	○																				○	3
this here								○					○				○						3
接続詞 like			○										○									○	3
目的格主語								○					○									○	3
The trouble [thing] was,....								○									○					○	3
kiddo															○			○				○	3
注意の喚起法								○					○				○						3
助動詞haveの同化現象	○																○						2
助動詞haveの意のof			○																			○	2
前置詞 like			○	○																			2



表現形式 \ 作品名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計
I says ....			○										○									2
(on) account ofの接続詞的用法							○														○	2
All I wanted was ....			○										○									2
誤った綴り																○					○	2
接尾辞-like													○								○	2
動詞+副詞+前置詞の結合													○								○	2
all the ways, a long ways													○								○	2
副詞 way													○								○	2
wisht, oncet													○				○					2
仮定法現在の用法		○																				1
instead of do			○																			1
2重助動詞													○									1
目的格に代わる主格																					○	1
形容詞 open																					○	1
the dayの接続詞的用法														○								1
be a long time																					○	1
合 計	13	12	20	15	7	8	11	15	12	10	9	6	27	14	8	7	25	12	13	11	32	287

- 14-6 All I wanted was .... [21編中2編に見られる]
- 14-7 誤った綴り [21編中2編に見られる]
- 14-8 接尾辞-like [21編中2編に見られる]
- 14-9 動詞+副詞+前置詞の結合  
[21編中2編に見られる]
- 14-10 all the ways, a long ways  
[21編中2編に見られる]
- 14-11 副詞 way [21編中2編に見られる]
- 14-12 wisht, oncet [21編中2編に見られる]
- 15-1 仮定法現在の用法 [21編中1編に見られる]
- 15-2 instead of do [21編中1編に見られる]
- 15-3 2重助動詞 [21編中1編に見られる]
- 15-4 目的格に代わる主格  
[21編中1編に見られる]
- 15-5 形容詞 open [21編中1編に見られる]
- 15-6 the dayの接続詞的用法  
[21編中1編に見られる]

15-7 be a long time [21編中1編に見られる]

上記の作品21編のうち、10編以上の作品で用いられている省略表現; or something, and allとその類型; 軽蔑語法; 誓言・問投詞・強意表現; 造語的表現; Eye Dialect; Repetition; I mean; kind of, sort ofの表現形式はSalingerの初期の作品の文体を特徴づけていると考えられる。当然、これらの表現形式は*The Catcher in the Rye* (1951), *Nine Stories* (1953), *Franny and Zooey* (1961)などの作品においても反映されている。最後に、初期の作品21編中に見られる上記49の表現形式の頻度を表にしておく。

上の表で、口語を主体とした文体を特徴づける表現形式を多用している作品は(21)"The Inverted Forest"(1947), (13) "Soft-Boiled Sergeant"(1944), (17) "This Sandwich Has No Mayonnaise"(1945)であり、スピーチ・レベルの低い発話が多いことが特徴となっている。"The Inverted Forest"では、Raymondの母やMaryの夫Howie Croftの発話に、"Soft-Boiled Sergeant"では、主人公のPhillyの

言葉や Burke と Philly の対話に, "This Sandwich Has No Mayonnaise" では, 主人公の Vincent 軍曹や兵隊同士の対話に, 口語を主体とした表現が多く用いられていることがわかる。

(注)

- 1) 小林資忠「J. D. Salinger の初期の短編について (5)」(『愛媛大学教育学部紀要』, 第II部 人文・社会科学, 第36巻 第2号, 2004), pp.33-56.
- 2) 藤井健三『アメリカの口語英語 — 庶民英語の研究』(東京: 研究社, 1991), p.274.
- 3) 藤井, 前掲書, p.197.
- 4) 藤井, 前掲書, p.88.
- 5) 小林資忠「J. D. Salinger の初期の短編について (3)」(『愛媛大学教育学部紀要』, 第II部 人文・社会科学, 第35巻 第2号, 2003), p.30.
- 6) これに類似した例として, the whole time を使用した文があるので次に挙げる: He played the piano (during) the whole time (when) the old man was there. (76)
- 7) 完全な省略の例を1例示す: "... (Have) You guys got an agent?" (13)
- 8) Warren French, *J. D. Salinger* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1963), p.71.
- 9) 刈田元司・渥美昭夫『サリンジャー選集3』(東京: 荒地出版社), pp.161-162.
- 10) 刈田・渥美, 前掲書, p.162.
- 11) 刈田・渥美, 前掲書, p.162.
- 12) 藤井, 前掲書, p.281.
- 13) 藤井, 前掲書, p.282.
- 14) この作品で用いられた or what の例を挙げておく: "I don't know what the hell he is, dead or what," she said. (113) [Raymond の母の発話]
- 15) Harold Wentworth and Stuart Berg Flexner (ed.), *Dictionary of Slang* (Second Supplemented Edition) (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1975), p.10.
- 16) 小西友七『アメリカ英語の語法』(東京: 研究社, 1981), p.339.
- 17) 小西, 前掲書, p.181.
- 18) 小西, 前掲書, p.198.
- 19) Corinne の11歳の誕生日前日の日記の文には, 誤った綴りの語が多くみられるが, そのいくつかを追加する: in the libery [=library] after dinner (111)/ Parade Prejudice [=Pride and Prejudice] by Jane Orsten [=Austen] (111)/ give me the elsie [=else] I don't have (111) / his cloths [=clothes] (111)  
またこの日記には, 誤って to 不定詞の to を落とした文も見られる: She wrote in the front of it in your golden chain of friendship (to) consider me a link. (111)
- 20) 沢田敬也『アメリカの文学方言辞典 — 辞書にない語をひく—』(東京: オセアニア出版, 1984), p.402.
- 21) Harold Wentworth, *American Dialect Dictionary* (Tokyo: Meicho-Fukyu-kai Publishing Co., Ltd., 1981), p.700./ 沢田敬也, 前掲書, pp.311-312.
- 22) Frederic G. Cassidy & Joan Houston Hall, *Dictionary of American Regional English* (Volume III I-O) (Cambridge, Massachusetts :The Belknap Press of Harvard University Press, 1996), pp.49-50.
- 23) 小西, 前掲書, p.328.
- 24) この "watty" は "For Esmé — with Love and Squalor" にも見られる: With his hand, he shielded his eyes for a moment against the harsh, watty glare from the naked bulb over the table. — "For Esmé — with Love and Squalor" in *Nine Stories* (Boston: Little, Brown and Company, 1953), p.157. ; 副詞としては "tobacco-breathily" (112)(タバコ臭い息で)のような造語的表現も用いられている。
- 25) Cf. 藤井, 前掲書, p.10; pp.249-250.
- 26) 次の文は否定を含む that 節を否定したもので, 2重否定ではない: "Can'tcha see he's not gonna give 'em to ya?" (113)
- 27) "(Is) Your husband dead?"(113), "(Are) You in town, Corinne?"(132)や"(Do) You happen to have any cigarettes with ya, by any chance?"(113)のような頻度の高い省略表現は除く。

(2004年6月7日受理)